知事記者会見（平成２５年３月１１日）

●知事発表
　な　し

●幹事社質問事項
（１）東日本大震災から２年目に当たっての所感
（２）１期目４年間を振り返って

時間：１２：５９～１３：３４
場所：プレゼン室

（幹事社）
　よろしくお願いします。

（知　事）
　はい、どうも。

（幹事社）
　今日、知事の方から発表事項は無しということなので、幹事社質問に入らせていただきます。
　始めにですけれども、一昨年の震災から今日で２年ということですけれども、発生当初からいろいろ御苦労されてきた点もあったと思いますけども、この日を迎えての所感ということで、ひとつ今のお気持ちをお聞かせ願えればと思います。

（知　事）
　はい。今日で、今日の２時４６分ですか、２年目ということであります。２年前の状況は、それこそ鮮明に覚えております。県議会の確か、３月１１日、最終日でありました。あの最終日の挨拶をしている壇上のときに、あともう五、六行で終わるというときにグラグラッときました。
　それから２年、非常に早いもので２年でございます。この間、被災者の受入れということで、これまでも現在も１，２００人を超える方が避難をしていらっしゃいます。また、大きい問題では瓦礫の受入れ、いわゆる燃えるものについてはもう既にやっていますけども、不燃物もまだこれから県で受け入れるというそういう状況もございまして、引き続きやっておるわけであります。さらには、多くの職員を現地に派遣していたり、いわゆる震災時の緊急的な対応の後、現在もそういう事後処理が続いております。
　ただ、やはり被災地の方々というか知事さんだとか関係者からお聞きしますと、また報

道でもあるように、現地のですね、なかなか復興といいますか、これが進んでいないという状況があります。確かに震災の規模が非常に大きい規模でありました。また、通常の火災だとかのそういう大きな、そういう災害とは異なりまして、津波ということで元のところになかなか家を、あるいはいろんな、住むことが果たしてどうかという、そういう大きな問題に突き当たっていまして、なかなか三陸等々については土地もございませんので難儀しているという状況であります。そういうことから、実際にですね、私もその後（最近も）２回ほど現地に行ってますけれども、最近ですね、それこそ元、家があったところはまだまだ全然そのままと。ごみは片づいてますけれども更地になっていると。しからば山間の方に、高台に住宅が立ち並んでいるかというと、そういう状況でもないと。極めて多くの方がいわゆる仮設住宅住まいということであります。確かに公共インフラは徐々に整いつつありますけれども、やはり、通常の形で自分の家に住めるというのが、これがやはり最後の姿でありますので、そういうことからすると極めて現地の方がまだ御難儀していると。これについてはですね、まだまだ相当かかるのかなという感じがいたします。

もう一つは、複雑にしておりますのは、特に福島県の原発の問題であります。これも二、三日前の報道によりますと、廃炉まで、完全に廃炉であそこを更地にするまで４０年かかると。しかも相当の間、それまで放射性物質はあそこに存在するわけでありまして、たとえ直接的な燃料関係を除去した、取ったとしてもかなり汚染された機材が残るわけでありまして、そういう意味からこの放射能汚染、原発の放射能汚染の問題は、本当の意味で終局するとなると、もう多分４０年で廃炉、さらにはですね、いろんなそういう排水関係で土地が汚染されてますので除染にも限界がございます。そういうことからすると、これはそれぞれの思いとは別にやはり相当、一世紀を要するのかなという、そんな感じがいたします。そういうことで、まだまだいわゆる復興は緒についたばかりと、私はそういうふうに思っております。

そういう中で秋田県がどうあるべきかということであります。当然観光等については、秋田が一番奥まってますので、そういう意味で被災地の状況が観光面なんかについても復興しないと、これは秋田にもこの後も影響を及ぼすわけでありますが、逆に言うと秋田でそういうものについて頑張って、できるだけ被災地についてもいい意味での波及効果が及ぶようにという、この努力はこれからも続けていかなきゃなりません。

また、人的な支援あるいは被災者の方で秋田に避難されている方が、特に福島の放射能関係のそういう御心配で避難されている方は、なかなか現地に帰るという状況に至るということはなかなか時間がかかると。中には、やはり今１，２００人を超える方がいらっしゃいますけれども、場合によっては秋田に定住すると、したいという、そういう思いも強くなっていくんじゃないかと思います。そういうことで、そういう被災者の方々の思いについてもできるだけこれに応えれるような形で県も臨まなきゃならないということであります。

最後に、一番私として、これから、これは我々もそうでありますが、日本全体の皆さんが、国民が特に心にとどめなきゃならないことは、これを風化させないという、この教訓はですね、全てに我々、被災しなかった地域にもこの教訓というのは当然生きるわけでありますので、やはり現地が正常な姿になるまではやはりこういう風化させずに、様々な形でできる支援をそれぞれの国民の皆さん、県民の皆さんがやっていただきたいというのが

偽らざる気持ちであります。
　そういうことで２年という月日、あっという間でしたけれども、次第に光景が薄らいできます。そして世代もどんどん変化します。そういう中でこれをいかに風化させずに理想的な復興をできるだけスピードアップしてやるかやらないかという、これがこれからの政治の責任でもございますし、それぞれの国民、県民の皆さんの、ある意味ではそれを背負ってこれからもいかなきゃならないという、そういうことであろうと思います。そういう感想をいたしております。

（幹事社）
　ありがとうございます。震災に関してですね、各社さんの方から御質問お願いします。

（記　者）
　先ほどおっしゃいました観光には力を入れていかなければいけないということなんですが、具体的に今後に向けた何か具体策というのを今考えの中でもお持ちなのかどうかというのが１点と、県内に避難されていらっしゃる方々への支援ということでも具体的にこれからこういったことをというようなプランなりお考えなりがあれば教えてください。

（知　事）
　はい。観光面ではですね東北６県のいわゆる観光博なんかで連携をしております。そういうことで、これはいつだったかな、今年になってからだっけ、いずれ東北６県でこれからもまとまって、そういう観光ＰＲをしようという、そういう動きは確認しております。国の方の予算がどうなるかは別にいたしまして、やはりそれぞれみんなルート観光でやっておりますので、これからも隣県との連携を密にしていろんな企画をしなきゃなりませんし、また、それぞれの今度は、特に三陸沿岸なんかのある程度の公共基盤のその復興に伴って訪れる方もいらっしゃるでしょうから、逆に言うと秋田においでになってそしてそちらに回るという方もいらっしゃるでしょうし、そういうことも含めて、やはり観光については自分のところだけでよければいいじゃなくてですね、逆に言うと秋田はあっちの方がよくなってもらわないと秋田もですね、なかなか難しい面があるんです。ですからそういう意味では、これまでの観光ルートについても大事にしていきたいと思っております。
　あとは、それぞれ時期的に様々なイベントだとかそういうことをやりますけれども、この後、青森、岩手、秋田とこう、いわゆるデスティネーションキャンペーンも続いていきますので、そういう中での首都圏への全体としてのＰＲも必要ではないかと思ってます。
　あと、被災者の避難している方々、住宅（支援）が３年まで延びたわけであります。いずれ多分、福島の放射能関係の方（に対する住宅支援）が３年になって、まだ延びると思いますけども、やはり恒久的な形でこちらにいらっしゃるとすると職の問題ございます。ですから秋田においては、それでなくても雇用情勢悪いわけでありますので、なかなか難しい面もございますけれども、これからも被災者支援室はそのまま４月以降もそういう状況でやっていきますので、当面はそういうきめ細かな相談活動あるいは情報提供、あるいは就職の斡旋、こういうことはやっていかなきゃならないと思っております。

（幹事社）
ほかにありますでしょうか。
それでは２つ目に移らさせていただきます。今日が年度末、定例会見としては最後ということですね、任期最後の定例会見ということだと思いますので、この４年間を振り返って知事の方からお願いします。

（知　事）
はい。私が知事に就任した４年前は、ちょうどリーマンショックがその前の年の秋ということで、もろにそのリーマンショックの影響を受けている時期でありました。あの当時思い起こしますとですね、ちょうど由利本荘地区を挨拶回りというか、そういう回っているときに、幾つかの会社の閉鎖あるいは操業の休止という、そういう状況の会社にも足を運んでいろいろお話をお聞きしたことを思い出しております。その後、若干持ち直しましたけれども、そういう中で、それこそ２１年の秋には政権交代という劇的なそういう政治の場面がありました。そういう中で一生懸命やってきたわけでありますが、その後、それこそ大震災という、また、大震災の１ヵ月、ちょうど１ヵ月後に私も体調をこの場で、それこそ、まだ覚えています、書類を落として拾うときに違和感を感じて、それから病院に行ったという、そういうこともございました。ただ幸い１ヵ月半で復帰できましたけれども、その後も今度は様々な、今度は欧州の経済危機によるやはり全体的な円高基調の定着という中で、輸出産業を中心とした雇用問題が起きたと。さらに１２月の政権交代ということで、この４年間、経済・雇用と政治という、こういう２つの大変大きな、そして震災、こういう形での非常に大きなですね、衝撃的な出来事が続いてきたということで、私としても気が休まる暇がなかったという、これは我々の宿命でございまして、どういうときもこれ平穏、これ無事、世の中は問題ないなんていうことはないんですけれども、それでもこの４年間というのは、これまでの歴史の中で大変な大きな出来事があった４年間ではなかったかと思います。
そういう意味で何とか皆様方の御協力の中で現在までやってこれたということでありますが、やはり様々な政策、目論見についてそう簡単にはいかないものもございまして、自分なりに努力はしましたけれども、そういう点について力及ばなかったのかなという、そういう思いもあります。また逆に、幾つかの課題になっていた積み残しの件については、かなりいろんな議論がありましたけれども、何とかこれについてその形をつけるというところまでも来ましたけども、これもそれで終わりじゃないんです。この後もそういうものについては十分力を入れてというか、その後の問題に力を入れていかなきゃならないということで、何といいますか、“まあ～忙しかったな”って、一言で言うとそういう感じがします。
最近はですね、携帯にも防災のメールが入りますので、夜寝るときもここにこう置いておくとですね、ブーブーブーッて鳴るんですよね。音出すとかみさんに叱られますので、バイブで、ですから夜、何かですね、知事になって一番あれなのは、夜、何か鳴るとですね、何かまた事件起きたんじゃないかというと、ムクッとこう起きる習性がついてしまいました。なかなかその熟睡ができないという状況もございますけれども、何とかやってこれました。そういうことで、この後またその次ということで今モチベーションといいます

か、気持ちを少しこう固めて、この後もしっかりやらなきゃならないなという、そういう感じを今抱いております。

また皆様方とのやり取りの中でも、いろんなことがございます。私いつも言うんですけども、どんなこともですね、これ、いろんなことの激論をしたり意見を交わしたりする中で必ず勉強になるものはあるということは確かであります。これは議会のみならず皆様方とのやり取りの中でもですね、“ああなるほど”と、“そういうふうに見られているのか”とね、“そういう視点で見られてる、あっなるほどな”という、“そういうのは注意しなきゃならない”とかね、そういういろんなことがございますので、私なりに鼻っぱしは強い方ですけれども、いろんなそういうやり取りの中であったことについては、割と謙虚に後に生かそうという、そういう気持ちも一方で持ってますので、これからもよろしくお願いしたいと思います。

（幹事社）

ありがとうございます。関連で何か御質問ございましたでしょうか。

（記　者）

任期１期目、お疲れさまでした。先ほど知事の御発言の中で、自分なりに努力したが及ばなかったかなと、一方で何とか形をつけることができたかなというところもあるというような、振り返っての実績の感想でしたけれども、自分なりに努力したけれども及ばなかったというような政策面のところと、一方で形ができたかなと自分で評価される点というのは具体的にはどのようなところなのでしょうか。

（知　事）

はい。まず先に、その形ができたというのはですね、やはりこれどうしてもですね、ある意味で行政、まああの、議会の、最終的には行政が判断して自らがコントロールできるもの、こういうものはやっぱり議論があっても熱意を持ってやるとできるんですね。いわゆる“なかいち”の完成だとか大型製材工場、あるいは、これは前の県政時代から課題になっていた子育て対策のね、小学生までの医療費助成なんていうのは、今から７年ぐらい前思い出すとね、あの頃は前の知事さんがそれこそ税金を、子育て税を上げると、上げるというか子育て税を新設してそれを使ってという話もありましたけども、当時、私も秋田市長でその財政の枠組みの中でできるんじゃないのかという、そういう思いもあったわけでありまして、最終的に昨年、この昨年の４月からできたわけであります。

そういう我々が、行政サイドが、これがやって議会の承認で、議会とやり取りしながらできるものについては最大限努力したつもりでありますが、やっぱり経済・雇用と少子化対策等については、これどうしてもですね、そういうデジタルにものがパッパッとこう変わるものではなくて、そういう流れをなかなか、本当から言うとバンと数字が上がればいいんですけどもそういうものではないんだけども、しかし、少しですね物事がこう分岐点というか、今までのこう下向きがちょっとこう傾向として明らかにこう傾向値としてよくなってきたとか、そこまでなかなか至らなかったというそういう点はですね、非常に、特に経済・雇用と少子化対策については、これは県民の皆さんもそういう評価であろうと思

います。ですから、これなかなか行政がそれコントロールすることはできませんけれども、しかし一定の方向は頑張ればできるものでありますので、そういう点についてはこの後さらに謙虚に様々な形で地道に、しかし効果的にやっていかなきゃならないという、そういう思いをいたしております。

（記　者）

もう１点なんですけれども、大変失礼なんですが、４年間の御自身の働き振りを通されて１００点満点で自己採点するなら。

（知　事）

大体、いつも大学の試験だとＡが９０点かな、Ｂが８０点、Ｃが７０点、Ｄが６０点、大体６０点が、私の頃は６０点、Ｄでいわゆる単位を取りました。そういう意味からすると、ＢとＣの間ぐらいかな。ですから７５点って、いつも７５点って言っているんですね。私は本当は、そういう意味ではＡは取れないけれども、少なくとも、私サイドで決断すればできたというそういうものについては幾つかやりましたので、その点はこれは評価していただくとともに、やはり私の方の決断だけではできない、社会情勢もあるという、しかしやはりこれはやっぱりそれも我々の仕事でありますので、社会情勢のせいにだけはできないわけでありますので、そういう点が結果論としてなかなか効果が上がらないと。それがようやく６０点から６５点ぐらいだと。そうしますと、中を取ると７５点ぐらいかなという、そんなふうに思っています。

（記　者）

すいません。知事選についてなんですけれども、今現段階で対抗馬が現れないような状況なんですけども、それについて知事がどのように御覧になっているのかというのが１点と、それから、その仮にですね、無投票という形になると県民の選択を受けない形での２期目に突入するという形になりますが、それについてどのように考えていらっしゃるかお願いします。

（知　事）

そもそも無競争ということは全く想定をしていませんでした。少なくても町村長選挙、あるいは市長選挙の小さいところは全国的にもそういうことがありますので、むしろその無競争ってどういうふうになるんだろうという、無競争の場合は選挙でどうやるんだって、逆に言うとですね、スタッフと一緒に、もし無競争になったら選挙ってどうやってやるんだという、そういうことまでいろいろ打ち合わせをするくらい、全く想定をしておりませんでした。そういうことで、確かに体も楽になるし、いや無競争だからいいなと言われるけれども、何となく無競争に対するその戸惑いというのはね、これ偽らざる気持ちです。確かにですね、１７日間一日だけ回ればいいという話になりますので、逆に言うと残念なのは各地域でいろんな新しい政策をですね、訴えるその機会がないんですよね。ですから逆に無投票になりますと、その１７日間やはりよくても悪くても回って幾つかの新しい視点だとか考えを述べますので、少なくともその会場、街頭だとか個人演説会の会場に来て

くださる方は、そういう情報が入るわけであります。それによって、その情報というのはまた広まっていくわけであります。

ですから、無投票になることによって逆に事後のですね、いろんな公約について、やはりいろんな面で県民の皆様にお示しするという、そういう別の意味の何といいますか、エネルギーが必要になるということ。もう一つは、やはりその後の県民の選択を得ないでということ等と、今のこの問題はつながりますけれども、やはりこちらとしてもいろんな政策をする際にですね、やはりそれについての評価をですね、より何といいますか、細やかにやはりくみ取りながらその政策、新しく示すものなんかはそういう姿勢が必要になるということで、これもですね、逆にエネルギーが若干かかるのかなと。確かに選挙戦になりますとですね、例えば５１対４９でも、いや選択受けたということでそれは１００にしてバンと政策打てるんですけれども、そういうことも、ちょっと私はそれは乱暴だと思いますけれども、幾ら勝ってもですね、一定のその様々な状況を踏まえてやらなきゃならないと思いますけども、しかし全く選挙でないとすると、いろんなことをやるについてもですね、今言ったとおりその公約の内容をよりこれから広く県民の皆さんに情報発信するとともに、新しいものに対する県民の皆さんのそのリアクションについてもこれ配慮しなきゃならないという、そういう別の意味の課題を背負うという、そういうふうに思っています。ですからいろんなことにおいても、スピーディーにやらなきゃならないことはやらなきゃならないんですけども、何でもかんでも、何といいますか、いきなりババッとやるということにはならないものも中には出てくるかなと思います。

（記　者）

新しいもの、次の公約ということだと思うんですけれども、これについての県民のリアクションをどのように拾う努力をされますかね。

（知　事）

これはですね、やはり様々なその関係者の皆さんのそういう例えば意見を聴取する、そういう機会はやっぱり増やさなきゃならないと思いますね。そういう大きなものについてはね。あとやはりパブリックコメントも含めてですね。あとはですね、ものによってはやはり幾つかのパターンがですね、あるものをやるときに我々としては、これをやります、こういうふうにやりますという場合と、これについてはこういう方法と、こういう方法と、こういう方法とこれをやります、これのうちどれを選択するかというそういう事前のね、もう一つ前のそういうことも出てきますので、議会についてもですね、そういう議論をですね、たくさんやらなきゃならないと思います。ですから、若干時間かかってもやっぱりそういうものはやらないとね、後でおかしくなりますので。逆にこうですよね、しかし４年という、これ仮にですよ、私がまだ無競争当選したわけじゃありませんから、仮に４年、またこの後やるとすると、その時間内にやっぱりある程度の方向を出さなきゃならないものをですね、ズルズルやるっていうわけにいきません。そうしますとですね、場合によっては非常に、例えば２年ぐらいにね、やろうとしているものについて、少なくてもそのプラニングの、おおよそのプランニングにもっと早く手をつけて、その議論をする時間を少し多く取ると、それによってその後スムーズに進むようにするとかそういうことがござい

ますので、逆に言うと２５年度が非常にそういう意味ではいろんなことをですね、まずはやるやらないは別にして、それに対する議論のたたき台をですね、２５年度内にかなりつくらなきゃならないものが出てくるのかなと思ってます。

（記　者）

分かりました。

（幹事社）

もう一方ぐらいいらっしゃれば。はい。

（記　者）

まずは１期４年間、お疲れさまでした。今の知事がおっしゃられていたことと若干重なる部分もあると思うんですけども、今回その自民党、社民党さん、それから公明党さんはじめとして概ね知事を支持されています。その上で議論をなさるということなんですけども、どうしても、正しい言い方か分からないですが、県政与党がですね、過半数を占めると議会が弛緩してしまったりだとか、あるいはその逆に当局の側が、まあどうせ通る、議案つくっても通るだろうというような悪い意味でのですね、弛緩が生まれてしまうのではないかというような懸念もあると思います。緊張感を持ってやるということはいつも知事がおっしゃっていることですが、この先幅広く支持されているが故に緊張感を高めていかないと県民と乖離してしまう可能性というのもあるような感じもするんですが、そこら辺どのようにお考えでしょうか。

（知　事）

これも、無競争で再選されるという前提の話でしょうけども、ただ私、割とですね、県民の皆さんとは同じ目線で情報交換というのは非常に多くやっているつもりであります。そういう意味で逆にですね、与党が多い方が今度与党の中で割れるという、これまでもそういう若干雰囲気あったでしょう。やはり、非常に議会で多くの人数の議員の方がいらっしゃる会派というのはですね、中でもいろんな意見の違いがございますので、そういう意味ではですね、また昔みたいにですね、私が県庁に入った頃は各どの会派にもですね非常に重鎮がいて、その方の鶴の一声で、いろんな意見があっても一つにまとまるということで、当時は、私も経験ありますけども、その重鎮に対してかなり丁寧にやってまとめてもらうという、今その手法はですね取れないですね。同じ政党の中でも三つぐらいバラバラと、バラバラじゃないですけども意見が違って、またそれぞれ自由にその意見を言い合う、そういう風潮がございますので、そういう昔のように重鎮でグッと抑えてもらうという、そういうことはできない状況でありますので、そんなにこれからいろんなことで私スルスルいくとは思ってません。

逆に言うと、こちらの方も、これも職員に今日もですね、今やってることですけども、もう一回検討するようにと指示しましたけれども、やはりきちっとした論拠と説明できるそのいろんなそういう下地を作って逆にやらないとですね、今度は執行部と議会の方がそういうことを余りおろそかにしますと一般の県民の皆さんからそういう意味では疑問が出

てきますので、そこら辺はですね、これは議会の方もそう思っていると思いますよ。

（記　者）

そうすると、緊張感を持ってこの先の４年間というのもやっていけるという。

（知　事）

ええ。緊張感というよりもですね、よりきちっとした説明をしないとできないのかなという。これ我々心がけなきゃ駄目だと思います。私どもの方ね。ですから逆に職員の方もそれだけ勉強になりますよね。何とか私もですね、議会の議論見てますと、皆さん方見てると分かるとおり、私は余り、“なんとでもいいからなんとだべな”、秋田弁で言うと、“なんでもいいがら頼むっす”と、あんまり言わないですものね、私ね。“ああでこうでこうだからこうで、これが当然でしょう”ってバッとやるもんですから、これ定理だとか公理だとかってやっぱりね、議会の方々に“なんと、中身は別にしてなんとか”っていうのは、それはなかなかね。そうじゃなくて、やっぱり議論に勝つにしてもね、勝つ負けるという言い方おかしいでしょうけども、こちらの議論を通していただくようにしても、きちっとしたその論拠をね、いわゆるいつも私言う論理的・物理的にきちっとお示しすると、そうしますとこれはそういう形で一定の着地点が見出せるという、そういうことだと思います。

（記　者）

ありがとうございます。

（知　事）

いいかな、せばそろそろ。

（幹事社）

ありがとうございました。

（知　事）

はい。じゃあまたよろしくお願いします。